

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一 3:9~15 「神の建物」

[9] 「私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です」

土くれにも等しい人間に神の協力者であることが許されるとは何と光栄なことか。主は人間という土の器を通して、神の畑に実りをもたせ、神の建物を立て上げるという栄誉を与えられた。この神の畑、神の建物とは教会の比喩であり、神の協力者とともにすべて「神の」ということばが頭についている。つまり、教会は神のもの、そのために働く協力者も神のために働く者であり、このように教会形成は常に神中心に進められていかなければならないのである。

[10-11] 「与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。そして、ほかの人がその上に家を建てています。しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです」

神の恵みによってパウロは賢い建築家のように教会の土台を据えた。そして彼の後に来た伝道者たちがその上に家を建てている。しかしそれが誰であろうとも、どのように建てるかについては、それぞれが注意しなければならないと警告されている。なぜなら建て方によってまったく価値のないものできてしまう恐れがあるからである。土台はすでに据えられており、それはイエス・キリストである。それ以外のものを土台に据えることはできない。なぜイエス・キリストが土台なのか。それは、キリストによってのみ罪が赦され、永遠のいのちが与えられ、神との交わりに入れられるからである。キリスト者によって立つ土台はこのイエス・キリスト以外にはない。

[12-13] 「もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです」

ここでは金、銀、宝石は土台であるキリストにふさわしい材料（健全で誤りのない教え等）をあらわし、木、草、わらはそれにふさわしくないもの（弱められ、水増しされ、バランスを失った教え、人間的な動機、野心等）をあらわしている。これらの違いはいつどのようにしてわかるか。それは、「その日」といわれているキリスト再臨のさばきの時に明らかになるのである。→Ⅱコリント5:10

[14-15] 「もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もし誰かの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、日の中をくぐるようにして助かります」

教会建設のための各人の働きの真価は、残るか、焼けるかの二通りの表現で示される。建てた建物が残れば、その人は良い忠実な働き人としての報いを神から受ける。しかし建物が焼けてしまえば報いは受けられないが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かる。再びイエス・キリストが地上に来られる時にどのような生き方をしていたかが問われるのである。私たちも神からの豊かな報いを受けられるような教会建設（形成）に励む者になりたい。